

ICCEES 幕張世界大会をふりかえって

亀田 真澄

2015年8月3日（月）～8日（土）の6日間、国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES: The International Council for Central and East European Studies）の第九回世界大会が千葉市幕張で開催された。ICCEES 世界大会とは5年に1度開催される、オリンピックのような大会だ。前回大会がストックホルムで行われたとき博士2年だった私は、次回大会が日本になるからということで、日本からも多くの研究者がストックホルムへ行ったのを噂には聞いていたものの、自分が深くかかわることになるうとは夢にも思っていなかった。しかし2014年7月、様々な事情が重なって現代文芸論研究室に事務局を設立することが決まり、事務補佐の島袋里美さんはウェブ担当として、助教の私は事務局次長ということで、研究室一体となって準備にあたることとなった。ICCEES 世界大会共同委員長である沼野充義先生と、松里公孝事務局長（東京大学法学部）の指示を仰ぎながら、時には過酷な、とにかく密度の濃い日々が始まる¹。

以下では、①準備編、②当日編、③学術編の3つに分けて、ICCEES 世界大会の報告としたい。①と②では、大会運営に携わった体験について記した。個人的な経験談が中心になるが、これから学会関係のイベント運営にかかわるかもしれない若手の方にとって、何らかの参考になれば幸いである。③では大会の学術的な特徴について、文化・文学関係を中心にまとめた。ご興味にあわせて、気になる箇所から読み始めていただければ光栄である。

① 準備編

現代文芸論研究室を拠点とした大会運営のための準備は、1年以上に及んだ。研究室の共用スペースに人を招いて小会議を行うこともしばしばで、空き時間に研究室を利用される学生・院生のみなさんには迷惑をおかけした。事務局の仕事として私が行ったことを、まずは時系列順で紹介したい。

【2014年】

- 7月 大会公式HPの東京大学文学部ドメイン上への移設とリニューアル²
- 8月 プログラム決定の委員会のための準備（プロポーザルのチェック）
- 10月 HPの項目追加、名入り封筒などの発注
- 11月 募金のための大会案内パンフレット作成、企業への募金願いの電話かけ
- 12月 日本語版HP開設準備（主に募金活動用）

【2015年】

- 1月 日本語版HP開設
- 2月 チラシ制作（デザインはLaboratories・加藤賢策氏に依頼）
- 3月 旅費援助の応募³
- 4月 当日運営のための機材等の発注開始、神田外語大学でのWi-Fi環境構築の検討

5月 冊子プログラム執筆、ネームカード及び参加者向け領収書のデータ作成

6月 登録受付方法、受付要員配置計画の検討、スタッフ用の運営マニュアル作成、ボランティア研修実施（神田外語大学）、コンgresバッグおよび封入物（ボールペン、メモパッド）発注、大会Tシャツ発注

7月 冊子プログラム入稿、冊子プログラム正誤表作成、会場内案内の紙の作成（各教室で行われるパネルの一覧表など）、ボランティア・オリエンテーション実施（東京大学および早稲田大学）

8月1日 現代文芸論研究室からの荷物の運びだし、現地入り



コンgresバッグの袋詰めは手作業でした。

事務局の仕事のなかで大きなウェイトを占めていたこととして、まずはホームページの内容充実があった。会場アクセスやセッション・ガイドラインなど、ちょっとした案内を出すにしても、それが公式見解となってしまうので、組織委員会内の各部会と調整しながら慎重に進めていかなければならなかった。

また、80ページに及ぶスタッフ用の運営マニュアル作成は、想像力を必要とする骨の折れる作業だった。誰がいつどう動くと問題なく進められるか脳内でシミュレーションしなければならないが、現場で動きうる主体が組織委員に加えてボランティア計133名となにしる多数であるし、マニュアルを作るためには決定しておかないといけないことがどんどん出てくる。メールボックスにたまっていくメーリングリストのポストや個別連絡の数は次第に膨大になり、1日に150通を超えることがあったのも、今ではいい思い出だ。

デスク、立て看板や様々な必要備品の発注も、想像力に頼るしかなかった。参加者が千人を超えることは想定していたため、「必要になったのでちょっと見つけてこよう」という心持ちではとても対応しきれないという緊張感があった。しかも「ウォーターサーバーに入れる水は全期間で合計何リットル必要か？」など、経験値ゼロの私にはおおよその数すら想像のつかないことばかりである（なお、本大会では696リットルを消費した）。この仕事のおかげで、特定の業界には妙に詳しくなると自負している。

そして、キャンセルに伴うパネル編成の変更がどんどん出てくるので、冊子プログラムの編集作業は時間との戦いとなった。印刷所への入稿を目前にして、沼野先生、松里先生、北井さんと私の4人で行った最終校正のための読み合わせは、午前1時までかかった。帰宅後、朝までかかってカナダ在住のレイアウトデザイナーとデータのやりとりをしたあとは、夢のなかでも校正をしていた。



開会式（開会式）



レジストレーション・デスク（神田外語大）

② 当日編

これまでの ICCEES 世界大会は欧米の都市で開催されてきたので、地理的には悪条件な日本で大会が無事に開催できるか、心配する声も多く聞かれた（参加者が少ないと、大きな財政赤字を出してしまう可能性もある）⁴。ウクライナ危機などの世界情勢悪化も影響して、予定されていた研究報告のキャンセルがばたばたと続くこともあった。しかし蓋を開けてみると、参加者の合計は 1310 名に及ぶ大規模大会となったので、私たちは肩をなでおろした⁵。

大会当日には多くのボランティアの皆様にご協力いただきましたが、主にロシア・東欧地域をフィールドとする学部生・院生や研究者 48 名にも大会運営の実務面にかかわっていただいた。現代文芸論研究室に所属する、西菜津子さん（院生、以下同様）、木原慎子さん、五月女颯さん、ウッセン・ボタゴズさん、豊田宏さん、田中壮泰さん（研究員）、ヤーサマン・ソルホディーニーさん（研究生）も、ボランティアとして大活躍してくださった。

初日に幕張メッセにて、大会開会式および元首相たちによるサミットを開催したのち、2日目からは神田外語大学の3つの建物で、いわゆる「学会本体」が始まった。大会期間中、私は登録受付デスクで問題が起きないかを確認し、何かあれば対応する予定だったが、実際には想定外のことに追われることとなった。エアコンが次々と機能停止するという事態が発生したのである。このときの幕張では猛暑日が続いており、8月7日には千葉での観測史上最高の38.5度を記録した。なぜこんなときにわざわざ学会をやるのかと、運営側の私でもつぶやきたくなる。「教室が耐えられないほど暑い」という苦情が次々と入り、行ってみると確かにエアコンが動いていない。エアコンは故障したというより、あまりの暑さに限界を超え、機能を停止してしまったらしい。会場部会の坂庭淳史先生（早稲田大学）と一緒に、「サウナ状態の教室」をその時間の空き教室へと次々に振り替えていく。ただし、はじめは3台だけだったエアコンの不調は、気温上昇にともなってだんだんと増えていくうえ、午前中だけが直射日光のせいで暑いとか、振り替え先の教室のほうが暑いとか、振り替え先の教室まで移動するほうが暑いとか、色々な条件が混ざり合っていく、こちらも動きの鈍くなる頭で教室振り替えのパズルを続けるしかなかった。

教室変更はオンラインおよび大型ディスプレイで確認できるようにはしていたが、実際にはそれを確認しない参加者も多いため、3つの建物の入り口と該当する教室にわか



神田外語大学での学会本体開始。

りやすく案内の貼り紙をするなどして、参加者を混乱させない工夫が必要であった。このための準備をしていなかったことは私の反省点であるが、三好俊介先生（駒沢大学）やボランティアのみなさんにも案内を手伝っていただき（何人かの方には文字通り、走り回っていただき）、会場内で熱中症の人が出るというような事態だけは避けることができた。

③ 学術編

さて、いよいよ「学術編」である。ICCEES 幕張世界大会では、政治、経済、国際関係、歴史、社会、法学、文学、言語、芸術、宗教など数多くの専門分野にわたる、333 のパネル・セッション、そして 46 のラウンドテーブル・セッションが、20 を超える教室で同時並行するかたちで行われた⁶。



各セッションは小規模なものが多かった。

現代文芸論研究室からも、博士課程の高橋知之氏が作家の青春時代をテーマとするパネルで、アポロン・グリゴリエフの初期作品を「反省」という観点から論じ、平野恵美子氏（人文社会系研究員）が 1890 年代ロシア帝室劇場のオペラとバレエの上演レパートリーについて、田中まさき氏（学振研究員）が現代ロシア演劇を代表するピョートル・フォメンコ作品におけるプーシキンの影響について、田中壮泰氏（学振研究員）がポーランドにおける「引揚げ」の経験を描いた作家としてイヴァシュキューヴィチを捉え直す報告をされた。また、現代文芸論にも協力教員として関わっているスラヴ語スラヴ文学研究室教授の三谷恵子氏は中世南スラヴ社会における「筆写」の役割について論じられ、小椋彩氏（非常勤講師）はレーミゾフ作品をカリグラフィ研究の観点から、エカテリーナ・グトワ氏（非常勤講師）はアンドレイ・ビートフ作品における著者と主人公や読者との関係について分析された。

研究室出身の秋草俊一郎氏（東京大学）が日本とロシアの文学における関係性をめぐるパネルで、日本の世界文学全集におけるロシア文学についての位置づけについて報告されたほか、現代文芸論研究室元助教の毛利公美氏（上智大学）はナポコフによる自作の映画化の問題について、同じく元助教の加藤有子氏（名古屋外国語大学）はブルーノ・ヤシェンスキ『パリを焼く』の版の問題について議論された。

これらの研究報告は学会内で非常に高く評価され、現代文芸論研究室のロシア・中東欧研究が、小規模ながらも高水準の成果を生み出していることが示された。私は冷戦期のグローバル・テレビ研究のパネルを組織し、1960 年代ソ連の宇宙開発が国際的なテレビ・ネットワークを利用することで、いかにして宇宙を国家宣伝の道具にしていたかを、アメリカ・NASA の事例と比較しながら報告した（本誌掲載の論文はその一部）。他 2 名のパネリストは、私が別の学会で知り合った研究者たちで、ルーマニア（ムスタタ報告）およびチェコ・スロヴァキア（グリフィス報告）において、歴史的事件の国際的なテレビ報道が生み出した政治的効果について論じた。討論の時間には多くの意見や助言をもらい、近いテーマに興味を持つ研究者たちと知り合うことができたのは、大きな財産であった。

研究報告のほかにも様々なイベントや文化プログラム、懇親パーティーが連日開かれた。特に文

学関係では 2015 年 8 月 7 日（金）、ロシア出身の作家ミハイル・シーシキン氏、ウクライナの作家アンドレイ・クルコフ氏、クロアチア出身の作家ドゥヴラフカ・ウグレシッチ氏と多和田葉子氏を招いてシンポジウム「スラヴ文学は国境を越えて—ロシア、ウクライナ、ヨーロッパと日本」を開催した⁷。混迷するウクライナ危機を背景に、文学者が社会に対して果たすべき役割をめぐる真摯な議論が行われた。



教室振り替えの貼りだし。

本世界大会では様々なディシプリンに基づく多数の研究報告があったため、その学術的意義をひとことでまとめるということはかなり難しいだけでなく、あまり意味もないことかもしれない。ここでは文化・文学関係に限定して、私なりの全体的な印象を記すにとどめたい。

まず大きな特徴としては、コンフリクトとのかかわりに関する報告が多数あったことがある。本大会のプロポーザル申し込み期間（2013 年 11 月～2014 年 6 月）は、ウクライナ危機が進展していった時期と合致していたこともあり、ウクライナ危機を扱ったパネル・ラウンドテーブルが 15 に及んだ。文学・芸術研究においても、文化が政治とは無関係ではいられない世界情勢を反映してか、「社会主義圏の戦争映画における敵の表象」、「ウクライナ表象の変遷」など、戦争と芸術・文学とのかかわりをテーマとするパネルが多かったのが特徴的である。特に私がプログラム委員を担当した「芸術・電子メディア」のジャンルでは、Facebook や Twitter といったソーシャル・ネットワーキング・サービスの政治的役割について論じる報告も少なくなかった。

次に、世界的な傾向ではあるが、やはり学際的な研究が目立っていたことを挙げたい。「ソ連における文学・経済圏の共振、および人間というイメージ探求」、「音響複製技術のロシア芸術への影響」、「バルカン半島の観光案内ビデオにおける言語使用」など、歴史学、社会学、政治学やその他のディシプリンを取り入れた、学際的なアプローチの報告が多かった。

最後に指摘したいのは、フィールドの多様性である。ロシア以外のスラヴ語圏からの参加は、財政上の理由によるキャンセルが相次いだこともあり、想定よりも少なかったものの、中央アジア、モンゴル、バルカン半島の国などを研究フィールドにする報告も散見された。またアジアとの比較をテーマにするパネルのほうは際立って多かった。特に「スラヴ諸国におけるジャポニズムの需要」、「ビート作品におけるユートピアとしての日本」など、日本との関係に着目したパネルが多かったのは、日本開催ならではの特徴であった。

最後に

1 年にわたって手探りでやってきた大会準備は、今から振り返ると反省点ばかりであるが、ある方からいただいた「今できることは今やる」という言葉をモットーとして、できそうなことはなんでも、後回しにせずとにかく早めに着手しておいたことは、大会を目前にした私自身を大いに助けた（願わくは研究生活においても、「今できることは今



レセプションにも多くの人が集まった。

やる」人間になりたいものである)。また、事務局の仕事をこなすのは、組織委員の先生方のサポートがなければとても無理であった。何人かの組織委員の方とは夜中まで電話やチャットをすることもしばしばであったが、いつも助けていただいて心に沁み入った。この場を借りて御礼申し上げたい。沼野先生が「みんなでやれば楽しくなる」と、どんなに忙しくても作業を共にしてくださったこと、島袋さんと北井さんのユーモアあふれる励ましで、実際に不思議なくらい楽しく乗り切れたことは、私の人生観を少なからず変えた。

大会準備は 34 名の組織委員が一丸となって進めていったため、その過程には様々な人間ドラマや事件があり、ドキュメンタリー番組のなかに生きているような不思議な錯覚を感じたのは、おそらく私だけではなかったと思う。そんな暑い夏は夢のように過ぎたが、世界の研究者たちが一同に会した幕張世界大会から、少しでも多くのつながりが生まれれば光栄である。



閉会式（神田外語大学）。

.....

【注】

1. 事務局は、松里事務局長、島袋さん、私と、事務局補佐の北井聡子さん（当時、総合文化研究科）、会計担当の中里敦子さんの 5 人体制である。現代文芸論研究室の五月女颯さん、豊田宏さんにも補助業務をしていただいた。また、2014 年 12 月からはスラヴ語スラヴ文学研究室の一部屋を、ICCEES 世界大会事務局の事務専用スペースとしてご提供いただいた。ご協力に、心より感謝申し上げます。
2. 大会ホームページは、もともとは北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで作成されていたが、現代文芸論研究室での事務局設立に伴い、事務局で運営・管理することとなった。
3. 応募総数 76 名のうち 58 名に援助を決定したが、その後参加キャンセルが出たため、最終的には 43 名に援助を行った。
4. ICCEES 世界大会は、近年では 2000 年にフィンランド（タンペレ）、2005 年にドイツ（ベルリン）、2010 年にスウェーデン（ストックホルム）で開催されている。なお、今回の 2015 年世界大会はカナダ（モントリオール）で開催されることが決定している。
5. 参加者の国別人数は、日本（427 名）、ロシア（166 名）、アメリカ合衆国（112 名）、ドイツ（67 名）、フィンランド（49 名）で、あわせて 50 の国と地域からの参加があった。
6. パネル・セッションとは、原則として、3 人の報告者、1 人の司会、1 人の討論者から成るセッションのことで、ラウンドテーブル・セッションは、パネルよりも自由な形式で一定のテーマについての発表および討論が行われるセッションのこと。
7. 国際交流基金助成、日本バンクラブ後援。一般無料公開、逐次通訳付きで行われた。モデレーターは沼野恭子氏（東京外国語大学）。
8. プログラムの詳細は、以下の大会 HP をご参照ください。 <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/program.html>